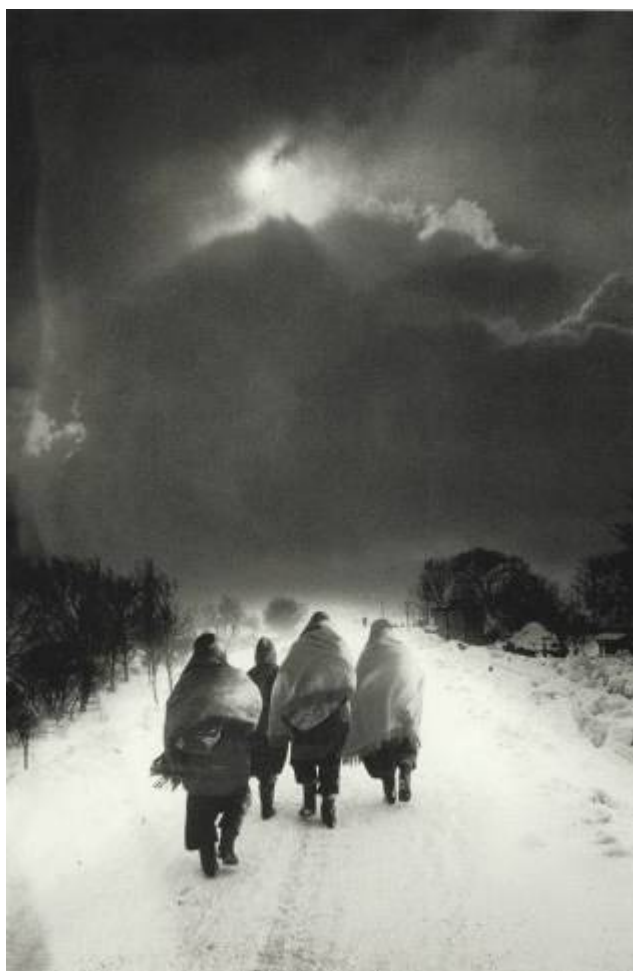


プレスリリース 2008. 9. 29

小島一郎

太宰治、棟方志功、寺山修司、また一人、北の鬼才

何ものをも失い、白い大地にへばりついていく姿、それはそのまま私自身の姿のようでもあり、あるいは又生きようとする人間の執念の姿かもしれない



北を撮る

つがる市(稲垣付近)、1960年、ゼラチン・シルバー・プリント
24.5*16.2cm、個人蔵

平成20年度青森県立美術館企画展

2009年1月10日(土)～3月8日(日)

■展覧会名： 小島一郎 -北を撮る- KOJIMA Ichiro: A Retrospective

■会期： 2009年（平成21年）1月10日（土）～3月8日（日）[公開日55日]

■休館日： 1月12日を除く第2，4月曜日

■開館時間： 午前9時30分～午後17時（入館は午後4時半まで）

■入場料：

	当日券：本展	当日セット券：本展＋常設展
一般	800（700）	1,200（1,000）
大・高	400（300）	600（450）
中・小	200（100）	250（150）

※（ ）内は前売・団体料金 ※心身に障がいがある方と付添者1名は無料

※小・中・特別支援学校の児童生徒及び引率者が、学校教育活動として観覧する場合は、常設展に準じて無料

■会場： 青森県立美術館地下2階企画展示室

■主催： 小島一郎展実行委員会 [青森県立美術館、日本放送協会青森放送局]

■協賛： 青森銀行 他

■助成： 財団法人ポーラ美術振興財団、財団法人野村国際文化財団

■協力： 東奥日報社 他

■後援： 青森市、青森県写真連盟、北陽会

■特別顧問： 小島弘子、鎌田清衛

本展についてのお問い合わせ

小島一郎展実行委員会事務局 角田(総務)・高橋(学芸)

〒038-0021 青森市大字安田字近野 185 青森県立美術館内

tel: 017-783-5241 / 017-783-3000 fax: 017-783-5244

www.aomori-museum.jp

*画像提供については、千代谷(広報)までお問い合わせください。

[1] 展覧会概要

戦後、国産カメラの普及やフォトジャーナリズムの発展を背景に、アマチュアの写真熱が高まった写真界において、生まれ故郷、青森を被写体とし、鮮烈な足跡を残した一人の写真家がありました。

小島一郎。大正 13(1924)年、青森市大町で、玩具と写真材料を扱う商店の長男として生まれた小島は、青森県立商業学校(現：青森県立商業高等学校)を卒業後、出征。戦後の混乱期を経て、昭和 29 年頃から本格的に写真を始めます。

津軽の農家の庭先や雪原の一本道といった何気ない題材から、日常を超えたイメージを引き出す突出した造形感覚と確かな技巧は、日本の報道写真の先駆者、名取洋之助に見出され、早くから東京で紹介されました。

昭和 36 年には、プロのカメラマンを目指し上京。同年に発表した『下北の荒海』でカメラ芸術新人賞を受賞し、その後の活躍が期待されます。しかし、郷土を題材とした写真で世に出た小島にとって、住み慣れぬ都市で新たな展開を図ることは、想像以上の困難を伴うものでした。募る焦燥感の中、東京での不振な仕事ぶりから抜け出すべく、北海道の四季の撮影を決意。昭和 38 年冬、現地に赴きますが、撮影は難航します。度重なる過酷な撮影行から、体調を崩した小島は、期待した成果を得る事なく青森に戻り、体力の回復を待ちながら、細々と写真の仕事が続けますが、昭和 39 年 7 月、39 歳の若さで急逝しました。

津軽の猛烈な地吹雪の中、角巻きをまとい黙々と歩く農婦。寒風吹きすさぶ下北の浜辺で、必死に船を引き揚げる漁師。青森という土地へ生きる人々への深い共感を、覆い焼きや複写の技法を駆使しながら、印画紙に刷り込むようにして力強く焼きつけた写真の数々は、その早すぎる死の後も、展覧会や写真雑誌で取り上げられ、再評価の波は絶えることはありませんでした。

遺族のもとには、約3,000点におよぶ小島一郎の作品や資料が残されています。それらのプリント、アルバムやフィルムの数々から、約十年という短い活動期間に、驚くべき密度でなされた仕事の全容が浮かび上がってきました。

本展では、その濃密な生涯をリアルに立ち上げるさまざまな資料とともに、約 200 点の珠玉のオリジナルプリントを展示。今なお多くの人を引きつけてやまない小島一郎の強烈な個性に迫る初の大規模な回顧展です。

●出展作品

小島一郎作品・資料： オリジナルプリント 約 200 点、資料等 約 50 点

小島平八郎作品： オリジナルプリント 3 点

[2] 展示構成 (予定)

■序： 父・平八郎と北陽会

小島一郎は大正13年、青森市大町(現:本町)で、玩具の傍ら写真材料を扱う商店を営む父・平八郎と母・たかの長男として生まれた。写真材料商組合の初代組合長もつとめた父の平八郎は、青森県の写真業界の草分け的な存在で、自らもカメラを手にし、淵上白陽の影響を強く受けた構成派的な写真を撮っていた。

小島一郎が写真の世界に足を踏み入れるにあたって父・平八郎からの影響は大きく、平八郎が創始した写真家グループ「北陽会」は、一郎の青森での写真家としての活動の基盤となった。

ここでは小島平八郎の作品をはじめ、小島一郎の写真家としての素地を築いた環境を浮かびあがらせるさまざまな資料とともに、初期の作品を紹介する。



小島平八郎(父)と小島一郎



小島平八郎作品、青森県立美術館蔵



東奥展特選作品 小島一郎《パイプ》(1954年)

[ニュープリントで展示予定]

■風景の発見： 津軽

昭和二十一年の春、私は敗残兵の一人として中国大陸から故郷の青森へ帰ってきた。戦災で焦土と化した故郷の町に立った時、私の目に入ったものは焼木の奇異な形と、点在する焼トタンの小屋ばかりであった。

写真集『津軽』に寄せたエッセイで小島はこう語っている。この後、小島は食糧の買出しに幾度も歩いた津軽野のことにふれ、その風景から受けた強い感動が、無心にシャッターをきらせた、と撮影行の始まりの興奮を表白する。

黒と白の豊かな諧調の中に表わされた津軽平野の雄大な自然や、そこで汗して働く農夫の姿。小島の代表作を生み出すことになる津軽野の風景の発見は、戦争という体験に裏打ちされていた。

ここでは、小島が目にした空襲後の青森市内の資料写真のプロジェクトとともに、木造、車力、十三湖の奥津軽から竜飛を經由し、三厩などの外ヶ浜の地まで、約 150 点に及ぶオリジナルプリントを展示。小島が生きた時代と津軽の風景へのまなざしを考える。



つがる市(木造～出の里)、1960 年頃、ゼラチン・シルバー・プリント、21.2*29.6cm、個人蔵



名刺大のプリントが貼り付けられたアルバム、個人蔵



五所川原市十三、1957 年、ゼラチン・シルバー・プリント、16.1*24.6cm、個人蔵

■個展「津軽」

小島一郎の初個展は、昭和33年(1958年)6月、東京、銀座の小西六フォトギャラリーで開催された。「津軽」と題されたこの展覧会には、津軽野の四季の風景や人々の暮らしを追った約120点のパネル写真が出品された。会場に配置された葉には作家本人の言葉とともに、名取洋之助からのメッセージが寄せられている。青森で小島と出会ってから、その活動に注目していた名取は、この展覧会の開催を後押し、作品のセレクションや展示方法について、助言の労を惜しまなかった。

小島弘子夫人の収蔵品に、この初個展の会場を撮影した43カットのネガが含まれている。本展では、一展示室を、このネガから作成したプリントのみで構成し、約五十年前の個展「津軽」の会場へと鑑賞者をいざなう。現在の展覧会場に出現した個展「津軽」の空間。そこには、都市の人々に対して小島がみせようとした「津軽」の姿があり、それはまた、以後の彼の写真家としての運命の伏線となって浮かび上がる。



■カラーの試み

白黒写真で本領を発揮した小島であるが、カラー写真に全く関心を示さなかったわけではなかった。『カメラ毎日』や『日本カメラ』といった写真雑誌に、津軽や十和田方面の風景を題材としたカラーの作品もたびたび発表したことがわかっている。

今回、小島弘子夫人に残された375点のカラーフィルムの一部から、ニュープリントを制作。死後に遺作として『カメラ毎日』に掲載された「鳶沼にて」など、発表作品を中心に4点を展示する。



「みちのくの春」『カメラ毎日』1962年4月号掲載より



「鳶沼にて」『カメラ毎日』1964年9月号掲載より

■都市へ： 東京

小島一郎は、カメラマンとしての活動の場を広げるべく、昭和 36 年(1961 年)夏、家族とともに東京で暮らし始める。小島家の長男としてのさまざまな重圧をはねのけ、不退転の決意で臨んだ東京行きであった。

上京してすぐ、下北に取材した「下北の荒海」でカメラ芸術新人賞を受賞し、幸先のよいスタートを切った小島であるが、東京での生活を始めてまもなく、体調を崩した上、翌年には、大きな後ろ盾となっていた名取洋之助が死去したこともあり、仕事は思うように軌道に乗らなかった。

結局、二年ほどで終止符を打つことになった東京時代、東海道や丹沢山麓など数えるほどしかない取材旅行と昭和 38 (1963) 年 3 月号の『カメラ毎日』に掲載された「東京の夕日」の 5 点以外、発表されたのは、あいかわらず青森で撮影した写真であった。

「東京の夕日」のオリジナルプリントを中心に、東京での仕事のわずかな痕跡から、東京という場所と写真家の関係性を考える。



青森駅のプラットフォームで仲間に見送られる小島一郎(右から 3 番目)[サトウユウジ氏提供]



1963 年頃
ゼラチン・シルバー・プ
リント、24.2*16.6cm、
個人蔵



1963 年頃
ゼラチン・シルバー・プ
リント、24.3*16.6cm、
個人蔵

「東京の夕日」『カメラ毎日』1963 年 3 月号掲載]より

■果てなき北： 下北

下北半島は津軽地方とならび、小島が写真を撮る始めた頃から、たびたび足を運んだ撮影地の一つであった。昭和 36（1961）年 1 月前半、大畑、大間、牛滝、九艘泊など、小島は二週間ほどかけて下北半島の各地を集中的に撮影しており、その時のカットの多くは、上京後に開催された個展「凍ばれる」(1962 年、富士フォトサロン)に出品された。

「凍ばれる」のシリーズに含まれる下北の写真の特徴は、中間調の出ないミニコピーフィルムを用いたインターネガの使用による、ハイコントラストと極端に省略化された造形にある。

「新人賞をもらった下北が主題の『凍ばれる』などは、中央の人たちの侮辱的な“さいはて意識”に反抗を試みた作品だ」(東奥日報、1963 年 5 月 30 日)と語る小島。「津軽」にみられた叙情性を徹底的に排除したその表現は、下北半島の自然とそこでの生活の厳しさを当事者として意識し、身体化した結果出てきたものであり、また当時、「さいはて写真」、「辺境もの」と呼ばれた、廃墟趣味の域を出ない興味本位の立場から辺陲の地を被写体とした都市の写真家たちに対する小島なりの抵抗の表れでもあった。

下北の撮影行を追体験できるネガのベタ焼きとともに、「凍ばれる」展で実際に展示された写真パネル(青森市教育委員会蔵)等オリジナルプリント約100点を展覧し、北の地を撮ることの可能性をさぐる。



下北郡大間町、1961 年
ゼラチン・シルバー・プリント、24.2*16.7cm
個人蔵



下北郡、1961 年頃
ゼラチン・シルバー・プリント、24.2*16.0cm、個人蔵



下北郡、1961 年頃
ゼラチン・シルバー・プリント、16.1*24.2cm、個人蔵

[3] 作家プロフィール

小島一郎 KOJIMA Ichiro (1924-1964)

■略歴

- 1924 (大正13) 青森市大町(現:本町) に玩具と写真材料を扱う「小島商店」を営む家の長男として生まれる。父・平八郎も写真家で、青森県の写真界の草分け的な存在であった。
- 1941 (昭和16) 青森県立商業学校(現: 青森県立青森商業高等学校)卒業。
- 1944 (昭和19) 入隊。中国各地を転戦。
- 1946 (昭和21) 春、復員。
- 1951 (昭和26) 家業の写真材料商を手伝い始める。
- 1953 (昭和28) 松井弘子と結婚。
- 1954 (昭和29) 《パイプ》で東奥美術展特選。
父・平八郎が創始した写団「北陽会」会長に就任(1961年まで)。
- 1961 (昭和36) 上京し、フリーのカメラマンに。《下北の荒海》で「カメラ芸術」新人賞受賞。
- 1963 (昭和38) 新潮社から『津軽 一詩・文・写真集一』(文・石坂洋次郎、詩・高木恭造) が刊行される。年末から翌年にかけての冬季に行なった北海道での撮影旅行中に体調を崩す。
- 1964 (昭和39) 青森市内で死去(享年 39 歳)。



小島弘子氏撮影

■展覧会歴 [*は個展]

- 1958 (昭和33) *「津軽」(小西六ギャラリー・東京)
- 1962 (昭和37) *「凍ばれる」(富士フォトサロン・東京)
- 1990 (平成2) 「戦後写真・再生と展開」(山口県立美術館)
- ～91 (平成3) 「戦後写真と東北」(宮城県美術館)
- 1994 (平成6) *「津軽」(JCII フォトサロン)
- 1998 (平成10) *「小島一郎写真展 ー津軽の風土を撮るー」(青森市民美術展示館)
- 2004 (平成16) *「小島一郎」(プレイスM・東京)
- *「小島のトランプ」(photographers' gallery・東京)
- 2007 (平成19) *「小島一郎」(ラットホールギャラリー・東京)

■写真集

- 1963 (昭和38) 『津軽 一詩・文・写真集一』(文・石坂洋次郎、詩・高木恭造) 新潮社
- 2004 (平成16) 『hysteric Eleven 小島一郎』ヒステリックグラマー
- 2007 (平成19) 『INOUE SEIRYU/KOJIMA ICHIRO』RAT HOLE

[4] 関連企画

■展示

ICANOF(イカノフ) 豊島重之 企画・監修

「小島一郎の北海道」

日時：展覧会会期に同じ

場所：青森県立美術館企画展示室 E

小島一郎は生涯のうち少なくとも三回北海道を訪れている。亡くなる約半年前も、数回にわたり北海道の撮影を試みていた。小島の最期の撮影地となった北海道の、残されていない写真をテーマに、青森県八戸市を拠点にアート活動を展開するグループ「イカノフ」の豊島重之が企画、監修し展示を行なう。極寒、開拓、アイヌ。小島一郎の写真に潜む北へのパサージュを切り開く、小島一郎展の黙示録的終章。

・明治期の北海道開拓写真、小島が発表しなかった昭和 35 年 12 月撮影の北海道写真等をプロジェクト

【豊島 重之 としま・しげゆき】

八戸市生まれ・在住。市民アートサポート ICANOF キュレーター。モレキュラーシアター演出家。1984 年、青森県芸術文化奨励賞受賞。1996 年、東京ジャーナル年間演劇賞受賞。編著に「パンタナル 2006」「68-72*世界革命展 2008」他。主な演出作品に「OHIO」(2006 年シアター ترام)「DECOY」(2007 年沖縄県立美術館)他。主な論稿に「飛び地の写真」「写真は密航する」(photographers' gallery press 所収)他。

■オープニングイベント

*オープニングセレモニーについては後日、美術館ホームページ等でお知らせいたします。

○シンポジウム

日時：2009年1月10日(土) 13:00-14:00

テーマ：「小島一郎と北の写真」

場所：青森県立美術館シアター

モデレーター：高橋しげみ (青森県立美術館学芸員)

パネラー：露口啓二 (写真家・札幌市在住)、豊島重之 (ICANOF キュレーター)

【露口啓二 つゆぐち・けいじ】

徳島県生まれ。東京の大学を卒業後、札幌に移住し、写真家として活動をはじめ。主な個展に、「触物紀」(1981年、駅裏8号倉庫、札幌)、「A skin flick」(1995年、INAX ギャラリー、札幌)、「地名」(2002年、LIGHT WORKS、横浜)。2002年、「現代日本写真/Black Out」展で日本を代表する8人の気鋭写真家の一人に選ばれ、2004年には、横浜美術館で開催された「ノンセクト・ラディカル 現代の写真 III」に出品。北海道の地名のアイヌ語的起源に着目し、その根拠となった一つの場所を二度にわたって撮影することで「『風景の亀裂』を誘発する」、「『地名』シリーズ、札幌中心部にかつてあった泉地と川の場所をたどる『ミズノチズ』シリーズなどを中心に制作を続けている。現在、『地名』シリーズの一環として下北半島の撮影も計画中。

特別上映会＋トーク

撮る場所、生きる場所

●特別上映会

「カメラになった男—写真家 中平卓馬」[小原真史監督作品] (91分)

1960年代末から70年代にかけて、先鋭的な写真表現の騎手として脚光を浴びた「伝説の写真家」中平卓馬の現在を追うドキュメンタリー映画。

<http://www.cinekita.co.jp/lineup/camera.html>

日時：2009年1月10日(土) 14:15-15:46

場所：青森県立美術館シアター

入場料：無料(展覧会チケットの半券のご提示をお願いいたします)

【小原真史 こはら・まさし】

愛知県生まれ。早稲田大学第一文学部人文専修卒業。多摩美術大学大学院美術学部芸術学科修了。第10回重森弘淹写真評論受賞。古屋誠一展『Aus den Fugen』キュレーター。現在、写真家・古屋誠一のドキュメンタリー映画を撮影中。

●トーク

日時：2009年1月10日(土) 16:00-17:00

場所：青森県立美術館シアター

モデレーター：豊島重之

パネラー：小原真史(映像作家)、北島敬三(写真家)、高橋しげみ

【北島敬三 きたじま・けいぞう】

長野県生まれ。1976年、森山大道氏らと共に自主ギャラリー「CAMP」を設立。1981年、日本写真家協会新人賞受賞。写真集『NEW YORK』刊行により、1983年、木村伊兵衛賞受賞。2007年、崩壊寸前のソ連を写したシリーズ『USSR1991』で伊奈信男賞受賞。現在は2001年に開設した自主運営ギャラリー「photographers' gallery」を拠点として、肖像写真から構成されるシリーズ『PORTRAITS』、撮影地に青森県も含まれた風景のシリーズ『PLACES』などを制作している。

■シアターイベント

「写真の声」

企画・監修：長谷川孝治(青森県立美術館舞台芸術総監督)

日時：第1回公演 2009年2月7日(土)

第2回公演 2009年2月22日(日)

場所：青森県立美術館シアター

■担当学芸員によるギャラリートーク

開催日：1月10日(土)を除く、会期中の毎土曜日、日曜日、午後1時から、担当学芸員による約30分のギャラリートークを行ないます。

■出版

記念写真集／展覧会カタログ

『小島一郎写真集成』（仮）

青森県立美術館＝監修

インスクリプトより、2009年1月上旬発売

B5変型判・上製・216頁

予価＝3800円＋税

津軽・下北の写真を中心に、主要作品約180点を集成。ダブルトーン印刷（一部カラー）。小島の軌跡をたどる論考（英訳付）、年譜・書誌を付録として収録する。写真家・小島一郎の、短くも充実した力業を映し出す、唯一無二の作品集。

【お問い合わせ】

株式会社インスクリプト

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-18-1-201

TEL：03-5217-4686 FAX：03-5217-4715

担当：中村

■物販

小島一郎代表作品のポストカードなどを販売いたします。

【お問い合わせ】

バランテック美術工房 / 株式会社バランテック

〒030-0802 青森県青森市本町1-3-12 NMSビル

URL：<http://www.balantec.co.jp/artshop/html/>

TEL：017-723-4640（←プレスお問い合わせ用で一般には非公開ですので御注意ください）